これからのキャリアを構築するために

理系の就職活動について、大学のキャリアアドバイザーの視点から考える

島影義和 Yoshikazu Shimakage 流通経済大学

1 はじめに

「理系の就職活動にはどのような特徴があるのだろうか?」「世間一般で話題となるいわゆる“就活”とはどのような点が違うのだろうか?」筆者は、かつてある理工系大学でキャリアアドバイザーとして就職相談の業務を担当していました。その経験から理系学生の就職活動について述べてみたいと思います。本稿は、主に理系学生の就職支援を行う立場にある大学関係者を対象に書いていますが、「2. 相談内容について」は学生の皆さんにも参考にして頂ければと思います。また、「3. 就職活動に対する学生自身の考え方と親の対応」は学生とその親に対するアドバイスを兼ねて書いています。ただし、内容につきましては、あくまでも筆者の限られた経験からですので、理論的ではない部分や独断も多々あるかと思いますが、その点は御容赦下さい。

就職活動の構造は、基本的には理系学生も応募者（学生）と採用者（企業・団体・官公庁など）とのマッチングであるという点で、文系学生と同じ部分や似た部分が多くあります。しかし、一方で理系ならではの特殊性や悩みも存在します。後ほど具体的な事例を挙げながら考えてみたいと思います。

理系学生の場合、大学で研究する分野は比較的明確で専門性が絞り込まれています。そのため、その専門性を生かした分野の企業で仕事をしようとする場合には、どのレベルの企業に入れるかといった悩みはあるにせよ就職活動で悩むことは余りありません。自分の専門を生かす場合は、指導教員やゼミの先輩のつながりなどから情報を得て推薦や紹介で決まるケースもあり、その点は理系就職の特徴で文系学生にはない有利な点と思われます。こうした理系のメリットを使って“順調”に就職できる学生はほとんど問題ありません。キャリアセンターに相談に来たとしても、履歴書やエントリーシートの書き方や面接の受け方といった、いわゆる“就活”のテクニク的な内容なので、一度説明すれば後は自分でやっていけます。

キャリアセンターに通常相談に来る学生は、こうした“理系の王道”ともいえる就職活動からのメリットを享受できず、それが悩みや問題の原因となっている学生です。就職活動は、学生が社会人になるための一種の“通過儀礼”の要素があります。小さいときからずっと学校社会の中で生活してきた学生が社会人として働く立場になるということは、今までの住み慣れた環境から未経験の世界へ飛び込んでいくということを意味します。そこには夢や希望や目標の実現といった前向きの期待がある反面、未知の世界へ踏み出すことへの躊躇・戸惑い・恐れなどのマイナスの心理的要素も強く働きます。そのため一人で悩みを抱え込んでしまい、キャリアセンターに相談に来ることすら避けてしまう消極的な学生もいます。

受験偏差値の高い、いわゆる有名大学の学生は、学校社会の価値観の中で勝ち抜いてきた経験を持っています。それは彼らの強みではありますが、また、就職活動では弱点ともなり得ます。つまり、彼らは成功体験があるために、その延長上で就職活動を考えようとします。具体的には、就職活動を就職試験と捉え、筆記試験（SPIや論述問題等）に精力を注ぎ込み高得点を狙います。公務員試験ではこうしたやり方もある程度は通用するかもしれませんが、しかし、一般企業の採用試験では、筆記試験は基礎的な学力をチェックするための予備的審査であることが多く、最終的には面接で採用の可否が決まります。筆記試験のない企業はあっても面接試験のない企業はないからです。面接試験では、その学生の持つ知識・能力・資質・性格・考え方・生活習慣・大学での過ごし方など様々な側面から質問が出され、複数の立場の面接官によって総合的に判断されます。加えて、理系では専門性とのマッチングを見るために、現場の管理者や技術者による技術面接があります。学生にとっては一般的に面接の経験は少ないため、この面接を受験準備のような面接テクニックを身に付けることによって乗り切ろうとする学生がいます。しかし、テクニックでは面接は乗り

切れません。面接はいかに“素の自分”をさらけ出せるかということがポイントであり、面接官も学生の本当の姿を求めて厳しい質問を浴びせてくるからです。

2 相談内容について

学生がキャリアアドバイザーに寄せてくる就職相談の内容は多岐にわたります。就職活動そのものに関する相談はもとより、研究上の悩み・研究室の人間関係・家庭内の問題・親との確執・サークルや部活動の悩み・アルバイトや奨学金などの金銭上の問題・留学生の抱える諸問題など多種多様です。表向きは就職の問題（「就職活動がうまくいかない」「内定がとれない」「エントリーシートが通らない」等々）ということで相談に来て、話を聴いていくとその背景には様々な個別の要因があります。その問題を解決しなければ前向きの気持ちになれず、結果として就職活動がうまくいっていないということにつながっています。また、メンタルの問題を抱えている学生もあり、その場合は学生相談室や健康管理室の臨床心理士などと水面下で連携しながら対応に当たることもあります。

純粋に就職に関する問題の場合は、大きく三つに分類されると思います。「学生自身の意識に起因するもの」「取り巻く環境に起因するもの」「就職活動の方法に起因するもの」です。以下、具体的な相談や悩みの内容と学生の問題点、それに対するキャリアアドバイザーとしての筆者の対応について述べてみたいと思います。

なお、丸付き数字で示した各項目が相談や悩みの内容と学生の問題点を表し、四角内の文章が筆者のとする対応の仕方や考え方を示します。

2.1 学生自身の意識に起因する問題

学生自身の問題としては、一言でいうと本人の意識が就職活動を行うレベルに達していないという場合が多くあります。その結果、やりたいことが分からなかったり、研究職だけにこだわったり、限られた自分の狭い知識に基づいた思い込みに左右されたりします。それは働くことや働く環境に対する知識が乏しく、働く具体的なイメージが持てていないことにも起因しています。例えば、研究に没頭してしまうと研究そのものが目的となってしまう、研究の成果が社会のどんな活動につながり、具体的にどのような製品やサービスとなって社会の役に立っているのかという点に思い至らなくなってしまう。企業は社会に役立つ活動を行っているからこそ、その存在が許され発展できるわけで、企業で働くということはその活動の一端を担うということにほかならないことを認識する必要があります。

工学系の学生は研究等で企業と連携する機会を比較的持てるので、このことが感覚的に分かっていることが

多いのですが、理学系の数学や物理などの基礎的学問を専攻している学生は、自分の研究が直接企業の製品やサービスと結び付くことが少ないためにイメージが湧きにくいようです。

相談や悩みの内容と問題点には次のようなものがあります。

①やりたいことが分からない。

自分が歩んできた道をもう一度よく振り返ってみましょう。現在の専攻が嫌でないなら、専攻を選ぶときには興味のあるやりたい分野を無意識に選択しているはず。 「分からない」ということは知識がないから分からないので、まずよく調べてみましょう。また、やりたいことの“正解”を一つ見付けなければならないと思いついてはいませんか？ やりたいことは一つではないはず。

②理系に向いていないので、文系就職したい。理系の勉強はこれ以上したくないので、学部卒で就職したい。

文系就職をする場合は、自己アピールやコミュニケーション能力にたけた社会科学系や人文系、スポーツ系などの学生と競争しなければなりません。文系就職といっても理系からの逃げの姿勢で内定が取れるほどは甘くはありません。理系で培った知識や合理的思考力、IT対応能力などが武器にならないか考えてみましょう。

③研究職以外には就きたくない。

企業には研究以外にも生産管理や知的財産管理、システム設計、技術営業など、理系が活躍できる職種は数多くあります。それらの職種はどれ一つが欠けても企業活動は成立しないので、仕事の内容を調べてみましょう。もし、「研究が上で現場が下」というような考え方をしているのならそれは間違っていると思います。

④理系ではあるが本来志望していた専門とは違う。

学問の分野は皆つながりがあり、重なり合っている部分があります。就職に際しては、今までやってきたことと本来目指していたこととの関連を考えて自分の目標を決めましょう。

⑤第一志望の大学（学部）を落ちて劣等感を引きずっている。偏差値上位の大学に対するコンプレックスを強く持っている。

入試の偏差値は大学受験で大学をランク付けるための“物差し”ではあるけれど、既に通り過ぎてしまった過去の遺物です。そんな過去の失敗を引きずっていても何のメリットもありません。むしろその挫折から学んだことをアピールの材料に使いましょう。そして、自分が学んでいる大学と研究に誇りを持ちましょう。社会には数多くの“物差し”があります。就職選考では知識以外の複数の“物差し”も使われるので、自分が得意とする能力をアピールすることが大切です。

⑥他大学の学部から偏差値の高い大学院に進んだが、出身大学に対する劣等感を引きずっている。

他大学から進学してきたということは、自分なりに目的意識を明確にしてチャレンジし、結果を出してきています。そのような前向きの姿勢が就職活動では何より大切です。企業に評価されるのでアピール材料に使いましょう。

⑦指導教員が指示（推薦）する企業には行きたくない。

推薦で得た内定を断ることは、推薦してくれた専攻科や指導教員、研究室に多大な迷惑を掛けることになるので、断るべきではありません。もし、第一志望ではないのなら、事前に指導教員に相談して自分の意思を伝えアドバイスをもらいましょう。

⑧研究ではなく現場の仕事がしたい。

自分のやりたいことを大切にしたい方がよいと思います。（建築学科で1級建築士を取った修士の学生が、大工になりたいと一般の工務店に就職した例もあります。）

⑨研究が忙しくて就職活動をする暇がない。就職活動を避けて研究活動に逃げている。

研究は重要で卒業研究や修士論文を仕上げることは優先してやるべきです。しかし、就職活動にも時機があり、それを逃すと後手に回ってしまい苦勞することがあります。大変ではあるけれど事前にしっかりと準備をし、研究活動の合間に短期間で効率の良い就職活動をして、早期に内定を取ることを心掛けましょう。

⑩たまたま数学ができたので高校の先生や親の勧めのままに理系へ進んだが、自分の中では納得していない。

現在は過去の積み重ねの上に成り立っているもので、過去を否定することはできません。現在の自分を肯定した上で、就職という将来に向けて自分の意思をはっきりさせ、今度は自分で決めましょう。

⑪就職活動をする気持ちになれない。頭では考えるが、やってみようという勇気が出ない。

就職活動をしたくない理由や原因は何かを考えてみましょう。理由や原因に気が付けば対応方法は見付けられるはずです。就職活動はやってみて初めて気付くことが多いので、失敗を恐れずにまず動いてみるのが肝心です。

⑫就職できないので、修士課程または博士課程へ進学する。

やらなければならないことを先延ばしにしても解決にはなりません。大学院は研究目的を持って本気で研究に打ち込むところであり、中途半端な気持ちや惰性では耐えられないでしょう。卒業までに何とか内定が取れるように頑張ってみましょう。

⑬エリート意識が強い。自己中心的な態度が見られる。

企業は同僚や取引先などいろいろな人たちとの協力によって成果を上げています。企業での評価は出身大学の名前ではなく、仕事ができるかどうかによって決まります。謙虚さや分け隔てなく人と接する態度が周囲の人との人間関係を良くし、結果的に仕事の成果も上がります。

2.2 取り巻く環境に起因する問題

就職活動を行おうとする学生にとって、周囲の人の理解や協力があるととても助かります。最も身近な親の影響は極めて大きいのですが、就職活動に取り組んでいる学生を持つ親の対応の仕方については後述します。親と

並んで大きな影響力を持つのが指導教員です。卒業研究や修士論文の作成を抱えながらの就職活動は学生にとって大きな精神的・肉体的負担です。指導教員に就職活動への理解を示してもらえない場合は、研究の合間を縫って教員に隠れて活動せざるを得ません。教員の側からすれば学生は学問が第一義であり、研究成果を上げることが就職に結び付くと考えますが、学生の考え方は様々で必ずしも専攻の先にある職業に就こうとは考えていない場合もあります。教員は積極的に就職活動を応援しないまでも、個々の学生についての考えや希望を理解してあげることが学生への支援となります。

環境のもう一つの要素は研究室の仲間です。研究では共同したり協力したりしている関係であっても、就職に関してはライバルです。推薦を得るための仲間内の競争があります。第一志望の企業の推薦を仲間にとられてしまったり、同じ企業に応募して自分だけが内定を得られなかったときのショックは大きいものです。それがきっかけとなって就職活動を断念してしまう学生もいます。

相談内容や問題点には次のようなものがあります。

①専攻する専門が直接職業に結び付きにくい。

数学や物理学などは理系学問全ての基礎となっています。研究によって培った論理的思考力や分析力、ITスキルなどは、どんな仕事をする上でも非常に役立ちます。視野を広げて、専門以外の職業でも研究内容が使えるかどうか探してみましょう。

②同じゼミの友人と同じ企業を志望したが、友人は内定を得、自分は不採用だった。

その企業にとってはたまたま友人の方が求める人材に近かったのでしょう。能力の優劣ではなく、企業との相性だったのかもしれませんが、同じ業種にはほかの企業もたくさんあるので、またチャレンジしてみましょう。

③指導教員が研究を優先させ就職活動をさせない。指導教員と反りが合わない。

先生はしっかりと研究成果を出させようとして研究に注力することを求めているのだと思います。しかし、就職することも大切なので、先生に自分の考えを話してみましょう。コミュニケーション不足が問題なのかもしれません。もし、それでも駄目なら研究の合間に頭を使った効率的な就活をやるしかありません。

④研究を頑張り過ぎたため精神的に病んでしまっている。

就職活動をしなければならないと思い込まないようにしましょう。医師に相談した上で、できることから少しずつやっていけばいいと思います。焦っても仕方ありません。（学部専攻と大学院専攻が異なっていたためにかなりハードな勉強をした学生が、その頑張りや原因となって統合失調症などの精神疾患を引き起こしてしまった例もあります。）

2.3 就職活動の方法に起因する問題

就職活動では就職支援サイトの活用が欠かせません。

就職支援サイトには自己分析のやり方、履歴書やエントリーシートの書き方、面接の受け方など“就活”に関する様々なノウハウが載っています。そして、就職支援サイトへ登録しておけば、自動的に企業の求人情報が提供されます。こうした便利な就職支援サイトなので、就職支援サイトに頼ってさえいれば必ず就職できると錯覚してしまう学生がいます。提供された情報によって有名企業の会社説明会に出席し、エントリーシートを提出しますが多くの学生は面接には進めませんし、たとえ一次面接に進めたとしても最終面接まで進めるのは一握りの学生にすぎません。企業は、就職活動の初期段階で関心を持ってくれた学生をなるべくたくさん抱え込んで“母集団”の形成を図ります。母集団が大きければ大きいほど優秀な学生が数多く含まれていると考えているからです。名前の通った一流企業であれば数十人の募集に対して1万人単位の学生が殺到することもざらにあります。この母集団が絞り込まれていく段階でほとんどの学生が落とされていきます。こうした“就活”を繰り返すうちに学生の就職に対する意欲が削がれていき、中には就職活動を諦めてしまう学生も出てきます。この“就活”の欠点は、受け身の消極的な就職活動であることです。甚だしい場合は、就職支援サイトを眺めるだけで何も行動を起こしていないのに、就職活動をした気分になってしまう学生もいます。専門性の垣根の低い文系学生は多かれ少なかれこのような“就活”の影響を受けていますが、理系学生の中にもこのような“就活”を行う学生が少なからずいます。それは理系就職の良さを生かしていない方法です。前述のとおり、理系の学生は専攻によって絞られた専門性があります。その専門性を生かせば、闇雲に専門以外の業界が異なる有名企業に応募することはないはずです。専門性を生かすのであれば就職支援サイトに頼り切ったような就職活動にはならず、もっと自主的で能動的な活動になるはずです。

相談内容や問題点には次のようなものがあります。

①就職活動のスケジュールが分からない。

一般的な“就活”スケジュールは、キャリアセンターやインターネットの情報で知ることができます。しかし、就職活動は周りから言われて始めるものではなく、あくまで自分の意思で始めて自分の意思で終わらせるものです。一般的なスケジュールを参考に、自分のスケジュールを立てましょう。

②就職活動はテクニクだと思っている。

企業が内定を決めるのは、その企業で働きたいという学生の熱意と意欲を認めたからです。熱意や意欲を表現するテクニクはありますが、内容の伴わないテクニクは薄っぺらですぐ見破られます。

③就職支援サイトに掲載されている企業が求人情報の全てだと思っている。

就職支援サイトの求人情報は、手数料を支払って掲載している企業だけで、最大の就職支援サイトでも毎年1万社程度です。日本には約200万社の企業があるとも言われていますから、大半の企業は学校への直接求人や自社のホームページ、企業団体の求人サイト、ハローワークへの求人申込みなど、費用の掛からない採用ツールを利用して求人活動を行っています。

④就職活動に差し障りがあるので、長期間の留学はしたくない。

留学中の期間が就活時期に重なってしまうと、国内での就職活動ができずに不利になるので留学はしたくないと考えているとすれば、それは非常にもったいない話です。目的を持ってしっかりと海外生活を過ごしてきた学生は、企業にとってはとても魅力のある学生です。海外にいても就職活動を行う方法はあります。

⑤企業を偏差値や有名度で測ろうとする。

企業を単一の尺度で測ることはできません。その企業が存立できているのは他企業と競争していける優位さがあるからです。その企業の特徴や強みはどこにあるのかを調べてみましょう。

⑥エントリーシートや履歴書などの応募書類を見てほしい。

誤字・脱字や明らかな間違いは指摘しますが、文章の添削はしません。自分で書かなければ面接段階で質問されたときに答えられないからです。どうしてそのように考えたのかについて訊き、書き方のアドバイスをします。

⑦面接練習をやってほしい。

やってみましょう。面接は慣れることが大切です。スポーツのように練習すればするほど自分をうまく表現できるようになります。

3 就職活動に対する学生自身の考え方と親の対応

学生にとって就職活動はそれまでの人生で経験したことのない未体験のゾーンといってもいいでしょう。それに加えて、卒業までに次の行き先を確保しておかなければならないというプレッシャーがあります。大学受験のように浪人してやり直すというチャンスも限定的です。卒業研究や修士論文作成に向けて必死になっているときに並行して就職活動を進めなければならず、学生には大きな精神的・肉体的負荷が掛かります。また、親にとっても子供の将来を大きく左右しかねない就職活動には無関心ではられません。子供の悪戦苦闘を見ると、スムーズに就職できるように口を挟みたくなります。親が経験した自分自身の就職活動の体験に照らしてアドバイスをしようとする。しかし、親が経験した時代と現在の就職活動とは状況が大きく変わっています。そのため、親の体験的アドバイスは的外れで、子供にとっては単なるプレッシャーの増加にすぎないこともあります。以下、

学生自身は就職活動に対してどのように取り組んだらいいのか、また、親がとるべき態度はどのようなものが好ましいのかについて述べてみたいと思います。

3.1 学生自身

社会に出て働くということも、多くの学生にとって未経験の世界です。アルバイトをしていたとしてもそれは仮の働き方であり、自分の人生を賭けた本気の働き方ではありません。ましてや実験や研究に明け暮れる生活を強られる理系の学生にとっては社会に出ることに大きな不安があります。こうした不安に打ち勝つためには、学生が自分自身に自信と誇りを持つことが大切です。そのためには現在の自分の立場をいかに自分で肯定できるかがポイントになります。自分の意思とは違った専攻や嫌々ながら理系に進んできている場合は、過去に遡ってみてもう一度自分の歩んできた道筋を振り返り、「自分はこれで良かったのだ」と思えるように自分自身を深く検討してみる必要があります。そして、将来に向けて気持ちを前向きにすることが就職活動に取り組むための何よりの原動力になります。

もう一つ大切なことは、学生が働くことの意味を考え、働き方や企業や団体・官公署などの働く場についての幅広い知識を持つことです。社会には様々な仕事があり、それぞれに異なった仕事人生の過ごし方があります。こうしたことへの知識がないと、社会へ出るにあたって学生時代の生活と同じものを求めがちになり、「職種は研究職」「会社は研究環境のいい安定した大企業」といった狭い選択肢しか思い浮かばなくなります。理系学部はその性格上、文系学部比べてこうした知識を学ぶ機会が限られますので、大学側でも学生自身が働くことの重要性に気付くような指導（キャリア教育など）がより一層必要であろうと考えます。

3.2 親の認識と態度

大学生の就職を取り巻く環境は、親が就職活動をした頃と比べて大きく変化をしています。表1は正規雇用(正社員)と非正規雇用(契約社員・派遣社員・パート・ア

ルバイトなど)の5年ごとの推移を示したものです(大卒以外も含みます)。

この表を見ると、日本の雇用者数は1985年の3,999万人から2010年の5,071万人へと1,000万人以上増加しています。しかし、正規雇用者数は1985年の3,343万人から2010年の3,363万人とほとんど増えていません。代わりにパート・派遣・アルバイトなどの非正規雇用者数が1985年の665万人から2010年の1,708万人へと大幅に増加しています。つまり、企業は雇用者の増加分を賃金が安く人員削減のしやすい非正規雇用者を増やすことによって対応してきていることが分かります。そして、大学進学者数も進学率の向上によって、1960年の約16万人から2010年の約62万人に増加していますので、大学生の就職を取り巻く環境は大変厳しいものになっているといえます。親はこの就職環境の変化をよく認識した上で、子供の就職活動に理解を示す必要があると思います。

その一方で、多くの学生は就職が本人自身の問題であることを認識しており、どの学生も自分で対処しようという気持ちを持っています。そして、自分の希望と周囲の環境との折り合いをいろいろと考え悩んでいます。親の意向や継承しなければならない家業や資産などについても十分知っていて、親が何を望んでいるかもよく分かっています。親にはこうした子供の気持ちを酌んで、良き相談相手となって子供の背中をそっと押してあげるような態度が望まれます。

①やる気を引き出す言葉

就職活動がうまくいっていない場合、子供の頃の良いところを見つけて褒めてあげて、自分の良さに気付かせることが傷ついた本人の心を癒し、自信を取り戻すことにつながります。親が社会人として経験してきたことを話したり、知っている企業の知識などを教えたりすることも役に立ちます。具体的には次のような対応の仕方です。

- ・小さい頃からこういうことが得意だったよね。
- ・自分は気付いていないかもしれないけれど、こんな点はとても良いところだよ。
- ・〇〇をしているときが一番楽しそうだったから、こういう仕事も向いているかもかもしれないね。トライしてみたらどうだろう。
- ・自分が就職活動をしたときにはこんな失敗をしたな。
- ・企業の規模や人気だけにとらわれるなよ。時代は変わるのだから。
- ・その会社は□□という新製品を出したところだろう？
- ・世間では余り知られていないかもしれないけれど、その業界には△△という会社もあるよ。
- ・どんな会社かということも大事だけど、どんな仕事をするかがもっと重要なんだよ。
- ・初めて仕事を任されたときはうれしかったな。
- ・仕事のやり方にはこんなコツもあるんだよ。
- ・会社では上司や同僚と上手に付き合うために、こんなことに気を付けてきたよ。

表1 雇用形態別雇用者数の推移

[単位: 万人, カッコ内は雇用者数に対する割合 (%)]

年	雇用者数	正規雇用者数	非正規雇用者数
1985	3,999	3,343 (83.6)	655 (16.4)
1990	4,369	3,488 (79.8)	881 (20.2)
1995	4,780	3,779 (79.1)	1,001 (20.9)
2000	4,903	3,630 (74.0)	1,273 (26.0)
2005	4,923	3,333 (67.7)	1,591 (32.3)
2010	5,071	3,363 (66.3)	1,708 (33.7)

[出所: 厚生労働省編『平成23年度版 労働経済白書』p.21 から作成]

②言うてはいけない言葉

本人の就職活動を一方的に否定したり、親の考えを押しつけたり、突き放したりすることはよくありません。また、誰かと比較したり、プレッシャーを与えたりすることや、逆に甘えの気持ちを引き起こすような言葉も避けた方がいいと思います。

- ・そんな会社は知らないぞ、大丈夫なのか？
- ・そんな会社は恥ずかしくて親戚には言えないじゃないか！
- ・そんな仕事、お前には向いていないんじゃないのか？
- ・どこを受けているのかわからないけれど、真面目にやっているのか？
- ・就職するなら地元にしなさい。
- ・安定しているから絶対に公務員にしなさい。
- ・友達はもう内定をもらっているのでしょ。
- ・もう大人なのだから就職くらい自分で決めなさい。
- ・いい会社がないのなら就職浪人して、来年再チャレンジすればいいじゃないか。

4 おわりに

就職は大学教育の出口として、入学と並んで重要な要素となっています。近年では少子化の進行によって多くの私立大学が定員割れの危機に直面している中、特に出口の就職活動に焦点が当たっています。それは学生の父母が高い授業料を負担しなければならないために、子供が順調に就職できる大学を選ぶ傾向があるからです。そのため、大学にとっては学生数を確保し経営を安定させるために、就職率の向上と就職先の確保が極めて重要な課題となっています。他方、採用する企業の側は、国際化が進んだ厳しい競争の下では従来のように新人の教育訓練に十分な費用と時間を掛けることができず、すぐにも戦力になり得る学生が欲しいというニーズがあり、望むような学生をいかに効率良く採用するかが課題となります。

理系は一般的に学部4年間と多くは修士課程2年を加えた6年間という期間を通じて、学生を専攻分野の専門家となるように教育しています。その結果、その専攻を生かせるような分野の企業に就職するのであれば、企業のニーズとも合致するのでそれほど苦労することなく就職ができています。学部や専攻科の推薦、指導教員の紹介などによる方法は、大学・企業の双方にとって効率の良い合理的なマッチングの方法です。企業に

としては採用実績から、大学での専攻内容、技術の習得レベル等が分かっていることが採用時の安心感につながります。この方法は理系就職の大きな特徴ですので、今後も維持・強化を図ることが必要であると思います。

一方文系は、音楽や芸術などの一部の専門性を追求する学部を除き、経済・経営・法律・社会などの学部は、学ぶ範囲が広く大半の学生は特定分野の専門家として教育されているわけではありません。そのために、就職に際しても専門性をアピールすることよりも、学生を持つ潜在的能力や人間性、社会性、生活習慣などを自分の“売り”とせざるを得ません。就職活動は自己アピールに重点が置かれるため、いわゆる“就活”のノウハウが必要となります。大学の就職部やキャリアセンターなどが3年生を中心に就職活動のサポートを行っているのはそのためです。

しかし、最近では理系学生に対しても、“就活”のノウハウを教えなければならなくなっています。その理由は学生の個性や志向が多様化し、専攻外の分野を志望する学生が増えていることです。また、本当に理系が好きで理系へ進学してきたのではなく、はっきりした目的がないままに周囲から勧められて来てしまったというような受動的な学生は、就職活動を前にして戸惑い悩んでしまうからです。

理系学生の就職活動は、従来から行っている専門性を生かす推薦などの方法をメインとしながら、そこから外れる学生に対しては、文系と同様の就職活動のサポートを行う必要があると思います。そして、理系学生に対しても、今後は自分自身の生き方を深く考えるためのキャリア教育の充実がますます必要となっていくのではないかと感じています。

島影義和

1946 生まれ。1969 早大・商卒。2005 法政大学院社会科学部研究科修士課程了。生命保険会社に35年間勤務。その後、私立大学で文系、国立大学で理系学生の就職支援業務を担当。2008 流通経済大・社会・教授。現在、同大学・経済・教授、就職支援センター長。キャリア科目を担当している。